

高校生のいじめ被害体験と抑うつ傾向

戸ヶ崎絵美 (東京家政大学大学院人間生活学総合研究科)

【問題と目的】

高等学校のいじめ認知件数は、平成24年度以降、1万件を超えて横ばいに推移している現状にある(文部科学省, 2016)。

いじめ体験が及ぼす影響について、いじめ被害体験と現在の精神的健康状態には関連があり、長期にわたって影響を及ぼしていることが明らかとされている(荒木, 2005)(坂西, 1995)。したがって、最悪の場合、自殺へと追い込んでしまう可能性があり、特に年齢が上がるにつれてその傾向になりやすいことが伺える(吉田・山下, 2008)。

そこで本研究は、高校生を対象とし、いじめ被害体験と現在の精神健康度と自尊感情との関連性、生活実態状況と高校生活上のいじめとの関連性について検討していく。また、バウムテストの中に表現される抑うつ感情等を把握し、いじめ被害体験との関連を検討していく。

【方法】

調査対象：定時制高校1~4年生490名

調査期間：2016年9月

調査内容：フェイスシート、生活実態調査、東京都版自尊感情尺度、日本版GHQ30精神健康調査、いじめ実態調査、バウムテスト

【結果と考察】

いじめ被害体験の有無について、Table 1に示した。

	全体 (n=327)	男子 (n=121)	女子 (n=206)	1年生 (n=123)	2年生 (n=89)	3年生 (n=85)	4年生 (n=30)
いじめ被害体験あり	84 25.69%	22 18.18%	62 30.10%	31 25.20%	24 26.97%	19 22.35%	10 33.33%
いじめ被害体験なし	243 74.31%	99 81.82%	144 69.90%	92 74.80%	65 73.03%	66 77.65%	20 66.67%

いじめ被害体験の有無と生活実態についての関連を検討した結果、現在の悩

み、学校に通う気持ち、睡眠時間、家庭での生活に有意な関連が示された。GHQ30では、合計得点、一般的疾患傾向、身体症状、不安と気分変調、睡眠障害、希死念慮とうつ傾向で有意差がみられた(Table 2)。バウムテストでは、不安指標、貧困指標で有意差がみられた。

	いじめ被害体験あり (n=84)		いじめ被害体験なし (n=243)		t値	効果量(r)
	平均	SD	平均	SD		
合計得点	12.32	7.60	8.92	6.73	-3.64***	.21
一般的疾患傾向	1.68	1.39	1.28	1.20	-2.50*	.14
身体症状	2.40	1.60	1.75	1.44	-3.50**	.19
睡眠障害	2.64	1.80	2.04	1.71	-2.75**	.15
社会的活動障害	0.96	1.22	0.87	1.13	-0.63 n.s.	.04
不安と気分変調	2.83	1.96	1.78	1.75	-4.61***	.25
希死念慮とうつ傾向	1.80	2.05	1.20	1.80	-2.38*	.14

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

これらの結果から、いじめ被害体験がある生徒は被害体験がない生徒に比べて、現在の精神健康度が低く、現在も何らかの悩みを抱えており、学校に通うことや家庭での生活に関してネガティブな気持ちを抱えていることが明らかとされた。いじめ被害体験は、現在の精神的健康度と生活実態状況にも影響を及ぼしており、生徒は抑うつ傾向にあることが考えられる。

しかしながら、いじめ被害体験と自尊感情については、有意差はみられなかったことから、いじめ被害体験があっても、現在の自尊感情が低くなるという可能性は少ないということが推測される。

また、いじめ被害体験あり群は、現在は解消されているが、「冷やかしい、からかい、悪口、嫌なことを言われたことがある(20名:23.8%)」と回答した生徒が最も多く、現在もいじめ被害を経験していることが推察される。